

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00556

研究課題名(和文) フィールド調査によるウガンダ西部諸語の声調の通時的研究

研究課題名(英文) A diachronic study of the tone systems of west Ugandan Bantu languages via field survey

研究代表者

梶 茂樹 (Kaji, Shigeki)

京都産業大学・総合学術研究所・科研費研究員

研究者番号：10134751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：タンザニア北西部からウガンダ西部にかけてバンツ系に近しい言語が話されている。南からハヤ語、チガ語、アンコレ語、トーロ語、ニョロ語であり概略、南から北に行くに従って声調体系は単純化する。これらの言語は基本的に単語の中に現れる高声調は基底において1音節である。名詞は接頭辞-語幹という構成をしており語幹の音節数をNとすると、各言語の声調パターンはハヤ語とアンコレ語はN+1、ニョロ語2、トーロ語1である。チガ語は基底において高声調が2音節に現れる単語がある。これを詳細に観察すると2個目の高声調は一定の環境における音声的出現であり、基本はハヤ語やアンコレ語と同じN+1型であることが確認される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、フィールド調査によるデータ収集により、ウガンダ西部に話される一連のバンツ系諸語の声調の通時的変化を研究するものである。世界には文字がなく文献のない言語が大半である。本研究は言語の通時的変化の研究は、文献がなくてもできることを明らかにした。具体的研究対象は、ニョロ語、トーロ語、アンコレ語、チガ語などの言語の声調の変化である。これらの言語は系統的に近く、文法も語彙もお互いよく似ている。しかしながら、その声調体系は大きく異なっている。なぜか。そして、どの様にそれぞれが発展してきたかを通時的に跡付けることは言語の歴史研究にとって大きな意味を有する。

研究成果の概要(英文)：In the area stretching from northwestern Tanzania to western Uganda, Bantu languages that are closely related are spoken, namely Haya, Kiga, Nkore, Tooro, and Nyoro from south to north. Roughly speaking, their tone systems become simpler as we proceed from south to north. These languages except Kiga have only one H-toned syllable in a word underlyingly. The noun is composed of a nominal prefix followed by a stem, and the number of tonal patterns is N+1 for Haya and Nkore, 2 for Nyoro, and 1 for Tooro, where N is the number of the syllables of the stem. Kiga has words with two H-toned syllables in a word underlyingly. A detailed examination reveals this pattern as a phonetic appearance of one H-toned pattern, and Kiga can be viewed as having the same tone system as Haya and Nkore.

研究分野：言語学

キーワード：バンツ系 ウガンダ 声調 通時変化

1. 研究開始当初の背景

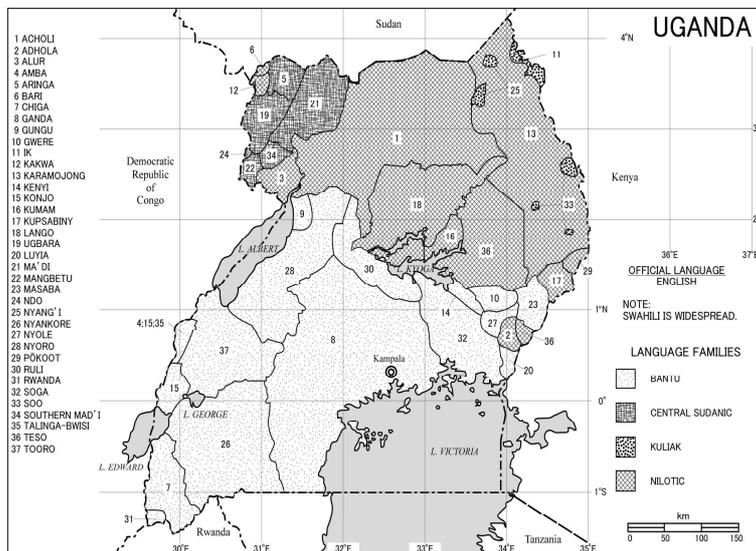
言語の通時的変化の研究は文献があればやり易い。印欧比較言語学が発展してきた所以である。しかしながら言語の通時的変化の研究は文献がなくてもできる。むしろ世界には文字がなく文献のない言語が大半であり、印欧比較言語学はむしろ例外と見るべきである。

文献のない言語の比較・通時的研究としては、アフリカ諸語とオーストロネシア諸語が有名である。本研究では、アフリカのバンツー系諸語の中でも、応募者が過去 20 年に亘って現地調査を続けているウガンダ西部の、一連の系統的に近いバンツー系諸語の声調の通時的変化のプロセスを解明することを目的とする。具体的には、ニョロ語、トーロ語、アンコレ語、チガ語などの言語の声調の変化である。これらの言語は系統的に近く、文法も語彙もお互によく似ている。しかしながら、その声調体系は大いに異なる。なぜか。そして、どの様にそれぞれが発展してきたかを通時的に跡付けることは言語の歴史研究にとって大きな意味を有する。

2. 研究の目的

本研究は、フィールド調査によるデータ収集により、ウガンダ西部に話される一連のバンツー系諸語の声調の通時的変化を研究するものである。アフリカのウガンダ西部には、バンツー系のお互い系統的に近い言語が話されている。北からニョロ語、トーロ語、アンコレ語、チガ語などである (地図参照)。

この 4 言語は、しばしばまとめてキタラ語と呼ばれることがある。ニョロ人、トーロ人、アンコレ人、チガ人はお互い言語が似ていることはよく知っているが、それぞれが別の王国を形成するなど異なる歴史を有し、そのアイデンティティは異なる。そのため、同じ言語を話しているとは思っていない。この 4 言語に加え、ウガンダに南接してタンザニア領で話されているハヤ語もニョロ語、トーロ語、アンコレ語、チガ語に極めて近いことが知られており、本研究の対象に加える。ハヤ語は申請者が 1990 年代に調査した。



ウガンダの言語分布図 (SIL International 2000 による)。ニョロ語は 28、トーロ語は 37、アンコレ語は 26 (図では Nyankore となっている)、チガ語は 7 である。ハヤ語はアンコレ語の南のタンザニア側で話されている。

3. 研究の方法

これらの言語は文字がなく古い言語データは皆無である。従って、調査はまず現地に赴き語彙調査から始める。そして文法を編んでいく。単語は単独で発音する場合と、同じ音韻句の中で後ろに何かが続く場合とでは発音、特に声調が変わる。従って、例えば名詞の後に様々な付加形容詞をつけたり、また動詞の後に目的語などの補語をつけて発音の違いを観察し、様々な交替形の中でどのような形が基底形 (基本形) かを見極めなければならない。

例えばニョロ語では「頭」は単独形では [omútwè] であり、後に所有形容詞 [gwâ:nge]「私の」をつけると [omútwé gwâ:nge]「私の頭」となる。詳細は省くがニョロ語の「頭」の基底形は /omutwé/ であって、単独形では最終音節の高声調が 1 つ前の音節に移り（高声調の予期）、自らは下降調となって痕跡を残す。後に所有形容詞 gwâ:nge「私の」が続くと最終音節の高声調は復活するが、1 つ前の音節に予期された高声調は予期されたまま残る。このような考察を行って初めてニョロ語では「頭」は /omutwé/ だと分かる。

アンコレ語では「頭」は単独形では [omútwé] である。この言語でも「頭」の基底形は /omutwé/ である。アンコレ語でも最終音節の高声調は 1 つ前の音節に予期されるが、自らは低声調となって痕跡を残さない。このようにニョロ語とアンコレ語では一見異なる発音が、音韻分析によって、いずれも「頭」は /omutwé/ であることが分かる。分析は基底形をもとに行い、そこにそれぞれの言語においてどのような規則がかかっているかを見極めることによって言語の変化を考察する。

4. 研究成果

研究対象言語は、南からハヤ語、チガ語、アンコレ語、トーロ語、ニョロ語と並んでおり、概略、南から北に行くに従って、声調の体系は単純化する。すなわち、ハヤ語の体系は、あたかも日本語東京方言のように、名詞の語幹の音節数を n とすると（名詞は接頭辞+語幹から成る）、名詞の声調のパターン数は $n+1$ となる（接頭辞は低声調）。そして、その区別は単独形でも区別される。アンコレ語も同様に $n+1$ パターンを有するが、単独の発音では区別が失われているものがある。しかし、付加形容詞を名詞に修飾させるなどして（付加形容詞は名詞に後続する）、名詞のあとのポーズを外せば、 $n+1$ のすべてのパターンが現れる。アンコレ語の北のトーロ語は、パターン数は単語の音節数に関係なく 1 つであり（1 型）、その北に話されるニョロ語では、パターン数は単語の音節数に関係なく 2 つである（2 型）。チガ語は現在調査継続中である。

ニョロ語の 2 型がどのようなプロセスを経てトーロ語の 1 型となったかは、すでに考察した。残る問題は、ハヤ語、アンコレ語の $n+1$ のパターン数を持つものが、どのように 2 型になったかである。これは日本語の九州 2 型アクセント体系の研究にも通じるものがあるが、この研究は現在継続中であり、チガ語の分析が完了すれば明らかになる可能性がある。

なぜ、声調体系の単純化が起こるか。その大きな要因の 1 つは、ポーズの前では高声調が高声調として実現されにくいからである。例えばアンコレ語の 2 音節語幹名詞の /amarirá/「喪」は単独では [amaríra] となる。語末の高声調はポーズの前では高声調として実現できないため、1 音節前で実現される。そうすると基底で次末音節に高声調を持つ /omukáma/「王」のパターンと融合する。/omukáma/「王」は単独でも [omukáma] である。高声調の移動に関しては右への移動が西アフリカの言語などの研究を通じて知られているが、この地域の言語の特徴は、左への移動（予期）である。これが、ニョロ語、アンコレ語、チガ語、ハヤ語のすべてに働き、最終的にトーロ語のような次末音節のみが高声調を持つ 1 型タイプに収斂する。

なお、ニョロ語の北には、ナイル・サハラ系のアチョリ語やアルール語が話されている。こういった他系統の言語との接触が全体としての声調の単純化に影響があった可能性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 梶 茂樹	4. 巻 35
2. 論文標題 Kiga語の命令形	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 スワヒリ&アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 90-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/95322	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 梶 茂樹	4. 巻 18
2. 論文標題 スワヒリ語の kwe li「本当」の由来に関するKiga 語からの考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 京都産業大学総合学術研究所所報	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kaji, Shigeki	4. 巻 57
2. 論文標題 Homology of the object relative clause and the temporal subordinate clause: Considerations from Nyoro, a Bantu language of western Uganda	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 京都産業大学論集.人文科学系列	6. 最初と最後の頁 63-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 梶 茂樹	4. 巻 17
2. 論文標題 目的語関係節とwhen従属節が同じであることについて - ニョロ語からの考察 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都産業大学総合学術研究所所報	6. 最初と最後の頁 61-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 梶 茂樹	4. 巻 17
2. 論文標題 英語について思うこと	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都産業大学総合学術研究所所報	6. 最初と最後の頁 101-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shigeki Kaji	4. 巻 8(2)
2. 論文標題 Review of Saudah Namyalo, Alena Witzlack-Makarevich, Anatole Kiriggwajjo, Amos Atuhairwe, Zarina Molochieva, Ruth Mukama & Margaret Zellers, A dictionary and grammatical sketch of Ruruuli- Lunyala (African Language Grammars and Dictionaries 5), Berlin, Language Science Press. 2021.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Linguistique et Langues Africaines	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4000/lla.2709	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kaji, Shigeki	4. 巻 1
2. 論文標題 Taboo Expressions in the Nyoro Language: Descriptions and Analyses	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Working Papers in Bantu Languages	6. 最初と最後の頁 68-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/117403	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梶 茂樹	4. 巻 55
2. 論文標題 異なる言語を話す人が1つのコミュニケーションの場を形成する時どのような言語的手段があるかについての類型論的考察 特にアフリカの事情に注目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都産業大学論集.人文科学系列	6. 最初と最後の頁 257-273
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kaji, Shigeki	4. 巻 1
2. 論文標題 African Communication: Sounds, Humans, and Visual Objects	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Gengo Kenkyu Anthology	6. 最初と最後の頁 41-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梶 茂樹	4. 巻 99
2. 論文標題 スワヒリ語の ndiyo 「はい」 の由来に関する二ヨ口語からの考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kaji, Shigeki	4. 巻 54
2. 論文標題 High Tone Deletion and Coreferential Objects in Nyoro Verb Conjugations	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Acta Humanistica et Scientifica, Universitatis Sangio Kyotiensis	6. 最初と最後の頁 269-310
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 梶 茂樹
2. 発表標題 同じ正書法でいいの、チガ語とアンコレ語？
3. 学会等名 日本アフリカ学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梶 茂樹
2. 発表標題 アフリカ人の名前
3. 学会等名 ことばの科学研究センター 令和3年度研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶 茂樹
2. 発表標題 異なる言語を話す人が1つのコミュニケーションの場を形成する時どのような言語的手段があるかについての類型論的考察 特にウガンダ西部の事情に注目して
3. 学会等名 多言語混在状況を前提としたアフリカ記述言語学研究の新展開
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶 茂樹
2. 発表標題 ことわざで自己表現するアフリカ女性
3. 学会等名 アカデミー・サロン（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kaji, Shigeki
2. 発表標題 Understanding taboo expressions through logical analyses: The case of Nyoro
3. 学会等名 Establishment of a Research Network for Exploring the Linguistic Diversity and Linguistic Dynamism in Africa (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梶 茂樹
2. 発表標題 スワヒリ語のNdiyo「はい」の由来に関するニヨ口語からの考察
3. 学会等名 スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Shigeki Kaji	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Shoukadouh	5. 総ページ数 641
3. 書名 A Rukiga Vocabulary	

1. 著者名 梶 茂樹 (編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 331
3. 書名 アフリカ諸語の声調・アクセント	

1. 著者名 Toru Okamura and Masumi Kai (eds.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Information Science Reference	5. 総ページ数 302
3. 書名 Indigenous Language Acquisition, Maintenance, and Loss and Current Language Policies	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------